

[最近のトピックス]

集団的フッ化物洗口法と集団的フッ化物歯面塗布法における乳歯齲蝕増加率の比較

八幡 祥子, 広瀬 弥奈

北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系小児歯科学分野

幼稚園児や保育所児の齲蝕、すなわち6歳未満の乳歯齲蝕は永久歯齲蝕と強い相関があるといわれている。この時期における乳歯齲蝕の増加を抑制することは重要なことであり、特に乳歯齲蝕が急激に増加する4歳以降の齲蝕予防が鍵となる。今回取り上げるフッ化物洗口法は、洗口後に萌出してくる永久歯において齲蝕予防効果が高いことは周知の事実であるが、フッ化物洗口開始時にはすでに萌出している乳歯に対してはどうか？従来から行われているフッ化物歯面塗布法より果して効果が高いのか？現在まで、乳歯に対するフッ化物洗口法の齲蝕予防効果についての報告は少ない。そこで今回は、フッ化物洗口法を開始することができる年齢すなわちブクブクうがいができるようになる4歳児を対象に同一小児で1年間の追跡調査（4歳児と5歳児）を行い、異なるフッ化物（以下、Fとする）応用法の幼児の結果と比較検討したので報告する。

同一小児の追跡調査では、F歯面塗布群（APFゲル 9,000ppmF 年3回実施 n=29：以下、TAF群とする）とF洗口群（NaF溶液 450ppmF 週1回実施 n=15：以下、FMR群とする）で Δ dmftと Δ dmft率（齲蝕増加率）を算出し比較検討した。

同一小児による追跡調査では、 Δ dmftは、TAF群1.51、FMR群0.53でTAF群がFMR群よりも有意に大きい値を示した（図1）。また、 Δ dmft率（齲蝕増加率）では、TAF群76.65%、FMR群17.26%だった（図2）。この結果は、F洗口法がF歯面塗布法よりも乳歯齲蝕を抑制することを示している。

Fの齲蝕予防作用には、歯質に対する作用と口腔環境（歯垢や唾液）に対する作用がある。今回対象の4,5歳児の乳歯は、すでに萌出して2年以上経過しているため、口腔環境に対する作用の方が重要である。F洗口法はフッ素濃度が低濃度で頻回応用のため、この口腔環境に対する齲蝕予防作用が高濃度小数回応用であるF歯面塗布法より高いことから齲蝕をより抑制する結果となったと考えられる。また、乳歯の隣接面齲蝕が増加する4,5歳児が対象であるため、隣接面齲蝕の抑制に効果が

高いF洗口法が効果的だったと思われる。F洗口法は幼児のミュータンス菌を抑制するとの報告もあり¹、乳歯齲蝕を減少させていくためには有効な方法と思われた。

文献

1. 広瀬弥奈他：フッ化物洗口実施地区と非実施地区における幼児の口腔環境の比較について、口腔衛生会誌, 63:166, 2013 (抄)。

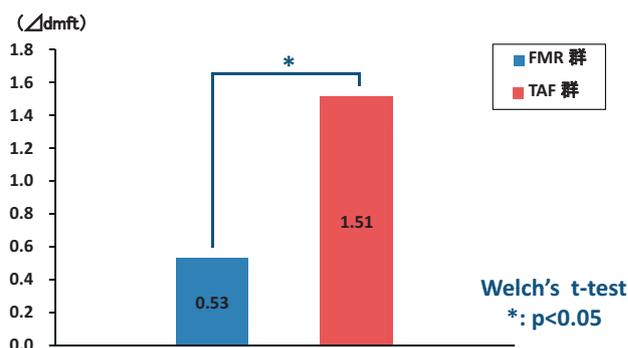


図1. FMR群およびTAF群における Δ dmftの比較

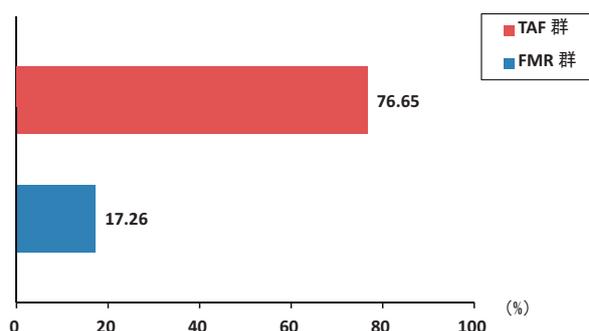


図2. FMR群およびTAF群における Δ dmft率（齲蝕増加率）の比較